

ロンドン郊外の「リトル香港」を探して

神宮寺 航一

一 はじめに

1997年7月1日、香港の夜空を舞ったユニオンジャックは静かに降納され、代わりに紅い五星紅旗が天へと登った。式典でのその印象的な瞬間とともに、香港の主権は英国から中国へと引き渡された。あれから28年、英国では香港からの移民が急増している。本稿は、香港移民の集住が指摘されるロンドン郊外の複数地区について、筆者が2025年9月に実施した実地踏査に基づき、その現況を報告することを目的とする。

近年の英国への香港移民の急増は、香港の British National (Overseas)¹ (以下 BNO) 資格保持者とその家族を対象に2021年1月31日に開設された、通称 BNO ビザを用いた英国への移民ルートの存在に起因する。BNO ビザ保持者には英国での就労・就学を認められ、5年の継続居住後に無期限滞在を経て市民権申請へ進む道が制度化されている。英国内務省によると、この制度を通して、2025年6月までに16万人以上が英国へと到着した [Home Department 2025]。

「それならば、英国にリトル香港 (Little Hong Kong/ 小香港²) ができているに違いない！」

移民と華僑華人を専門とする研究者であると同時に重度の香港迷³ (香港のファン) である筆者は、このニュースを聞いたときそう思った。ここで言う「リトル香港」とは、香港以外に存在する、香港人が集中居住し、香港的な特性に彩られた都市空間を指し、コリ

¹ British National (Overseas)、通称 BNO とは、英領時代の香港において、中国への主権移譲の10年前から有資格者が登録することにより取得できた英国籍の一類型である。香港での出生など、香港と特別な繋がりのある者に登録資格があった。当該資格者は、その証明として BNO パスポートを保持することができる。一方で、通常の英国市民権と違い、BNO のステータスは英国本土での無条件での居住権を付随しない。1997年7月1日以降、この地位の新規取得は不可能であり、世代継承も認められていない [愛 2016 ; Home Department 2020]。英国内務省の推計では、2020年時点で290万人が BNO の地位を保有している [Home Department 2020]。なお、日本政府も現在に至るまで BNO パスポートを日本入国の際の正式な旅券として認めている。

² 以下、本文のルビは広東語読みを表す。広東語とは、香港・マカオおよび華南地域を中心に用いられてきた漢語の一方言群であり、音韻体系や語彙・文法において標準中国語と大きく異なる。

アタウンやリトル沖縄など同様の「エスニック都市空間」³と呼ばれるものの一つである。「リトル香港」といえば、1997年の主権移譲前の香港の移民ブームにより形成されたカナダやオーストラリアに存在するものが有名であり、それらは多くの研究のフィールドともされてきた。この時期以降の香港移民は、都市郊外の中高所得層向けの住宅街に集住する傾向があると言われている。筆者の経験上、郊外の「リトル香港」は異国情緒溢れる観光地というよりはむしろ、香港をパッキングしてそのまま外国に持ち込んだような街であった。カナダ・バンクーバー郊外のリッチモンド (Richmond) やトロント郊外のマーカム (Markham) では、香港で使われる繁体字中国語の看板や張り紙が溢れ、広東語が飛び交い、本場さながらの^{チャーツァンテン}茶餐廳 (カフェ) や^{サイベン}西餅 (パンやケーキ) の店が立ち並ぶという、到底ここが北米とはとても思えない光景が広がっていたことが印象に残っている。

2021年以降、香港関係の情報が多数を占める筆者の SNS アカウントのタイムライン、そして動画共有サイトのおすすめ動画には、英国の首都ロンドン郊外の「リトル香港」を紹介する投稿、そしてそれに関連するニュースが毎日のように飛び交う。今のロンドン郊外では、筆者がカナダでかつて見たような「リトル香港」を見ることができる。そう確信し、筆者はヒースロー空港へ降り立った。

二 ソーホーのチャイナタウン

ロンドンで香港移民の集まる街として最も有名なのは、都心ソーホー (Soho) 地区南端の「チャイナタウン (Chinatown)」と呼ばれるエリアである。本稿のテーマ「郊外」からは少し離れるが、ここを訪れないとロンドンの香港移民は語れないと思い、まずはチャイナタウンを目指してソーホーを歩く。筆者がまず覚えたのが、ここは西洋であるはずなのに、なぜか非常に香港に似ているという感覚であった。車は香港と同じく左側通行であるし、LOOK RIGHT と書かれた道路の路面標示や歩行者信号機の棒人間も香港のものと同様である。街の雰囲気も中環や半山區といった香港の欧米人の多いエリアに非常に似ており (写真 1)、筆者は多くの香港移民が英国に渡る理由の一つを垣間見た気がした。

³ 「エスニック都市空間」の学術的定義や研究の歴史については、地理学者である杉浦直による論考 [2007] に詳しい。杉浦によると、エスニック都市空間は学問分野によりエスニックゲッターやエスニックエンクレイブなどとも呼称される。 [杉浦 2007: 19]

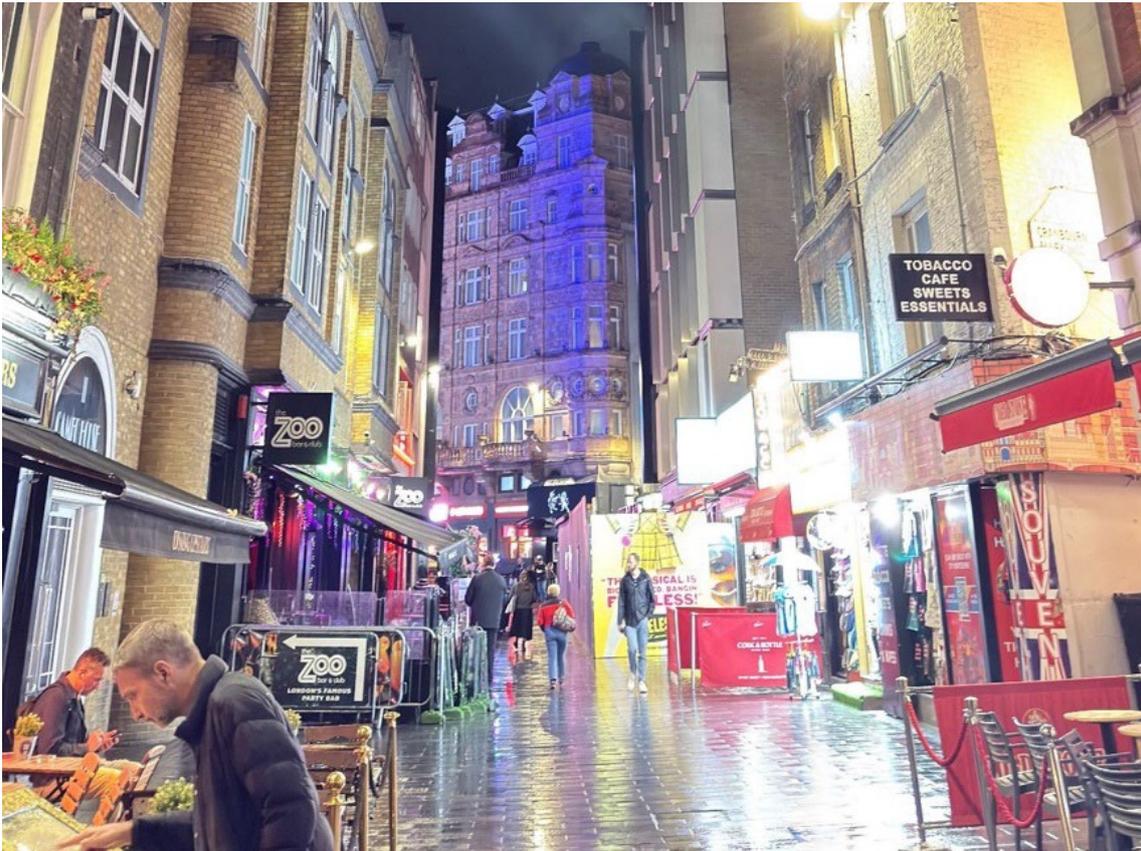


写真1 ソーホー地区の街並み（2025年9月10日、筆者撮影）

2016年に完成した中華風の門（写真2）がシンボルのチャイナタウンは、1960年代以降、香港移民が集住することにより形成された街と言われている〔王 2013〕。大通りには広東料理店が軒を連ねるが、現在では観光地の側面が強いようで、様々な国からの観光客で賑わっていた。そんな中、1985年に香港の旅行会社から送られたという2つの獅子像〔London Remembers 日付不詳〕が目を引く。地価の高い都心に位置するため、ここに居住している香港移民はさほど多くないと考えられるが、歴史的な香港との繋がりを感じられるエリアだった。

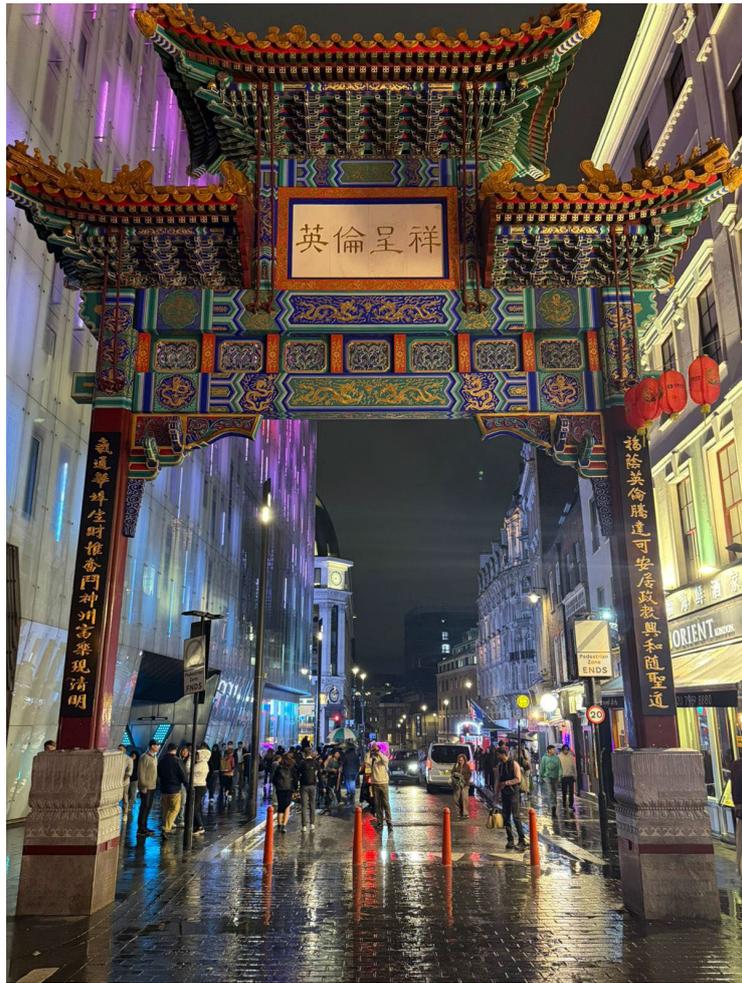


写真 2 チャイナタウンの樓門（2025年9月10日、筆者撮影）

三 コリンデイル地区

ロンドン北部のコリンデイル (Colindale) 地区は、歴史的に東アジア系の移民が多い街として知られる。BNO ビザ保持者の移住先としても人気があるようで、動画共有サイトにはここへの移住の情報の動画が多くアップロードされている他、SNS では香港移民コミュニティのグループもある。地下鉄コリンデイル駅を降り、中心部へのバスに乗る。自分以外の 3 グループの客は全員南方訛りのマンダリン（標準中国語）で話していた。

コリンデイル中心部にはアジア系の大きなフードコートがある（写真 3）。1990 年代には同じ場所に日系百貨店があったようだ。フードコートでは中華圏を中心にアジアの様々な国の料理が揃い、客家料理といった英国では珍しいジャンルの中国料理店もあった。筆者は香港の焼き物の店を選び、東アジア系の女性店員にマンダリンで三寶飯（焼豚、豚バ

ラとアヒル肉の井ぶり)を頼んだ(写真4)が、店員はマンダリンがあまり得意ではないようだ。その店員は筆者の後ろの客と流暢なブリティッシュイングリッシュで世間話をし、店員同士では広東語で会話していた。三寶飯は、昔の香港を感じさせられる非常に甘い味付けだった。



写真3 コリンデイルのアジア系フードコート(2025年9月13日、筆者撮影)



写真4 フードコートで頼んだ三寶飯(2025年9月13日、筆者撮影)

フードコートの手前には中華系チェーンの大きなスーパーがあり、中国大陸や香港、台湾だけでなく、日本や韓国、ベトナムから来た商品も多く陳列されていた。客が、おそらく顔見知りではない魚売り場の店員に「今日新鮮な魚はなに？」と自然に広東語で話しかけていた。もはや広東語はこの街の共通語の一つなのだろう。

コリンデイルの中心部を歩く。筆者が驚いたのは、道行く人々は広東語やマンダリンを話す人が多く、明らかに香港系を含む東アジア系が多い街であるのに、カナダの「リトル香港」とは違い、言語景観からはそれをほとんど感じさせないところであった。フードコートの近くの大型スーパーに入ってみても、客の半分以上が広義のアジア系であり、アジア各地の食材が揃っているにもかかわらず、陳列棚の表記は英語のみであるなど全体の雰囲気は普通の英国郊外のスーパーであり、筆者は必死に「多国籍」を隠しているかの印象を受けた。

2 時間ほどコリンデイルの街を歩いてみたが、中国語を用いた看板や張り紙は前述のフードコートと中華系スーパー以外では見ることはなかった。マンダリンを話す家族の間をすり抜け、街の真ん中にある大きな公園に入る。芝生が美しい英国らしい庭園風景のなか、大きな音楽をかけてヨガを行う 30 人ほどの集団がいた。数人を除いて全員東アジア系のような。筆者は思わず、音楽を流しながら中高年の人々がそろって体を動かす、中華圏の公園でよく見かける体操の集団を思い浮かべてしまった。

四 サットン地区

次に筆者は、ロンドン南部のサットン (Sutton) 地区を訪れた。サットンは、香港と英国双方のメディアで香港移民の集住が非常に注目されている街である⁴。動画共有サイトにはサットンへの移民を扱った動画が多く投稿され [YouTube 2025] (写真 5)、SNS の香港移民のグループに 1 万人近くが参加しているなど、BNO ビザ保持者の「移民熱」の中心地といえる場所であるようだ。ここに香港移民が集まる理由として、香港メディア Esquire Hong Kong [2021] は、交通の便の良さ、犯罪率の低さ、環境の良さ、平均収入や教育水準の高さ、そして簡単に香港や日本・韓国の食料品が手に入ることなどを挙げて

⁴ 例として大衆紙デイリー・メールは、ここを Little Hong Kong と称し、香港移民の実際の生活について解説する記事を報じている [Daily Mail 2025]。

いる。また 2025 年 4 月には、現地香港コミュニティのリーダーといえる人物がサットン区の区議選で当選している [Your Local Guardian 2025]。



写真 5 動画共有サイトのサットン「リトル香港」を扱った動画 [YouTube 2025]

これらのオンラインの事前調査で得た情報から、やっとカナダで見たような「リトル香港」を見られる。筆者はそう信じ、都心のビクトリア駅からサットン行きの電車に乗り込んだ。それから 30 分ほど、電車から見える景色は低層住宅が並ぶ英国の郊外の光景そのものだが、サットン駅に近づくとその田園都市的な風景に 2 つの真新しい高層マンションが見えた。この 2 つのマンションは特に香港からの移民に人気があるようで、香港のインターネットコミュニティでは「香港人ビル」と呼ばれている。そのビルの周囲も現在工事中で、今後この街の風景は激変していくのだろう。

駅を降りると、まず広東語で熱心に子供の教育の話をしている家族が目に入った。胸が高鳴り、サットンの中心部まで歩く。メインストリートは、意外にも典型的な英国の郊外の町並みと言った雰囲気の大通りだった。平日の昼間だったがそれなりの人通りがあり、街行く人の 1 割ほどが東アジア系といったところだ。中華系の小さなスーパーがいくつかあり、それらには広東語を話す人たちが多く訪れていた。また街のスーパーやショッピングモールでもロンドンの他のエリアよりは明確に東アジア系が多く、広東語も頻繁に聞こ

えた。一方で、中華系スーパー以外からは特に東アジアらしさや香港らしさを感じさせるものはなく、筆者は正直なところインターネット上での「リトル香港」との言説の乖離を感じた。

1 時間以上中心部を歩き、少し疲れた筆者は、小さなパブに入った。パブで食事を済ませ、エールを片手に長居していると、隣に東アジア系の男性とヨーロッパ系の男性の二人組が座った。二人はサイダー（英国のパブで定番の林檎酒）を注文すると、英語で何やら議論を始めた。男性は香港生まれのようで、酔いが回ってくるとともに自らのライフストーリーを語り始めた。自身がロンドンにきた経緯、ロンドンでの苦労、ここ数年の香港の変化、そして自らの現在の香港への感情を語る彼の話には、筆者は思わず聞き入ってしまった。British colony, One country, two systems, National Security Law—香港の過去と現在を象徴する英単語を発するたびに、彼の声に力が入る。最後に二人は「ロンドンは最高だ。俺達は自由だ。俺達には酒を飲む自由がある。チアーズ！」と言って乾杯していた。

お腹が満たされたところで、英メディアからも何度か取材されている有名な香港料理店を見に行く。この店のオーナーのカップルは、元々香港の^{ジャッキー・チュン}鰻魚涌でレストランを開いており、2021年にBNOビザで英国へ移民してきたようだ [Nunn 2024]。サットン駅から牧歌的な英国の郊外田園都市風景を20分ほど歩いたところに突如現れた香港的空間は、平日の昼過ぎにもかかわらず非常に多くの東アジア系の客で賑わっていた。

五 ブライトン市

最後に訪れたのは、ロンドンから1時間ほど電車に乗ったブライトン（Brighton）という海沿いの小さな街である。SNS上では複数の香港移民のコミュニティがあり、公民館で香港移民のための活動を行っている団体もあった。市中心部のジュビリー広場（Jubilee Square）で、香港をテーマにした大きなイベントが開かれたこともあるようだ。事前調査の限りでは最も「リトル香港」の存在を期待できる場所であった。

駅を出て、メインストリートを歩く。小さな街であるので、2時間ほどかけて都心部を隅から隅まで歩いた。しかし、どこも英国の一般的な田舎街の風景で、数件の香港料理店以外は「香港らしさ」を感じさせるものは皆無だった。何かしらの団体の広告や張り紙が見られるかもしれないと思い、ジュビリー広場、公民館や美術館の隅々まで目を凝らしたが、香港移民の生活の痕跡すらも見ることはできなかった。

せめて最後に香港らしい物を食べて帰ろう、そう思って香港料理店の一つに足を運ぶ。香港の茶餐廳そっくりの店内に、「一位？」（一人？）「食咩呀？」（何を食べるの？）という広東語が響く。筆者は「一份撈麵同凍檸蜜（汁無し中華麵と蜂蜜レモン水）」と広東語で注文した。店内では多くの客が広東語で話している。昼過ぎだったので、鴛鴦（コーヒー紅茶）や凍檸茶（レモン入りアイスティー）といった香港独特のドリンクを注文し、カフェとして利用している客が多かった。料理は、驚くほど香港で食べるものと同じ味だった（写真 6）。本格的な香港料理を英国の郊外で食べられることに筆者は感動する。「リトル香港」を見つけることはできなかったが、どこか香港島を思わせる海岸線の道を歩きつつ、この街になぜ香港移民が集まるのかが理解できた気がした。



写真 6 香港料理店の汁無し中華麵と蜂蜜レモン水

（2025 年 9 月 16 日、筆者撮影）

六 おわりに

以上のように、筆者の「リトル香港」探しは、期待とは異なる結果となった。郊外における移民の集住は、1990年代後半以降の移民研究における主要な関心の一つとされてきた。Li [1998] は、郊外住宅地への集住は必ずしも現地社会の同化を意味しないことを論じ、Zelinsky & Lee [1998] は、郊外で居住の分散があったとしても、90年代以降に加速度的に進化した情報通信技術により同郷のコミュニティは維持されていくことを論じた。2020年代、SNS全盛期に「移民熱」を迎えたBNOビザ移民は、移住前のネットワーク形成から移住後の情報収集までが全てがインターネット上で完結するため、その集住が街の言語景観には現れにくいのかかもしれない。現在の英国で席卷する排外主義という要素も、集住の事実が言語景観に反映されにくいことと無関係ではないだろう。また郊外では移民の居住が分散傾向にある上に、移動も車が中心となり動線が広がるので、そもそも特定の地理的空間を指して「リトル香港」などと呼ぶのは適切ではないのかかもしれない。筆者のような^{ヒョンゴンマイ}香港迷は実際に英国まで行くより、日本からオンラインコミュニティに参加して香港移民のネットワークを体感したほうが満足度の高い経験が得られる可能性もある。

それでは、なぜ香港のインターネット空間では多くの「リトル香港」に関するポストや動画が投稿されているのか。SNSネットワークが全盛期の現代で、物理的な都市空間と密接に結びついた「リトル香港」に香港移民はなぜ興味を抱くのか。筆者には、今回の訪問で自分なりの答えを見つけ出す出来事があった。今回の滞在中、筆者は別の調査も並行して行い、6日間ロンドンとその周辺を歩き回った。ちょうど極右団体による外国人排斥の大規模なデモが行われ、英国滞在中はいつも経験することではあるが「ヘイ、チャイニーズガイ!」「ジャッキー・チェン!」などと幾度となく地元の若者に絡まれた。挙句の果てには、繁華街でスマートフォンをひったくられ、今回の調査で撮影した写真の大半を失ってしまった。スマートフォンの強奪はロンドンで激増している犯罪であり、香港のインターネット空間では「犯人たちはもっぱら東アジア人を狙っている」との言説で溢れていた。数々のロンドンの「洗礼」に遭い、調査終盤に心身ともに疲れていた筆者は、何かしら「自らの東アジアのルーツを肯定するもの」を欲し、本稿の冒頭で述べたソーホーのチャイナタウンへと引き寄せられた。ふと入った中国料理店で料理を待っていると、東アジア系の女性がパートナーと思われるヨーロッパ系の男性を連れ店に入ってきた。女性はおそらく学習を始めたばかりの広東語とマンダリンを用いて、「^{ガウジー}餃子...^{ジャオズ}餃子?^{ウオーヤオジャオズ}我要餃子?」⁵

⁵ 「餃子をください」の意。「ガウジー」は広東語であり、「ジャオズ」「ウオーヤオジャオズ」はマンダリン。

と中華系の店員に水餃子を注文していた。店員がマンダリンで「広東語もマンダリンも上手いね」というと、女性は英語で「私は香港で生まれてすぐにロンドンに来たから、香港の記憶はないし、広東語もマンダリンも全然話せないの」と笑顔で話し、店員からマンダリンを教えられていた。その後男女は時折、二人の将来に関する話をしていた。なぜ女性はその話の場所としてチャイナタウンを選んだのかは分からないが、この場所がロンドン都心で最も、広東語やマンダリン、そして香港系というルーツを肯定する場所であることは確かだろう。

少し前にカナダのブリティッシュコロンビア大学が開いた近年の香港移民に関するオンライン研究会に参加したとき、香港系の参加者から「東洋文化から西洋文化へのアダプトが難しい」「香港が恋しい」という声が続出して覚えている。BNO ビザ所持者の中には、英国に馴染めず、日本など東洋の国に再移民する人もいるようだ。そんな香港移民にとって西洋の中の「リトル香港」——たとえ歴史的に重要な場所ではあるが今や香港移民は少なくとも、香港料理店が数件あるだけでも、香港移民以外にとっては普通の郊外の街だったとしても、インターネット上の言説の域を出ないのであったとしても——の存在は、大きな力となることに違いない。それが、香港移民たちがオンライン空間で「リトル香港」の言説を生み出す原動力の一つであると言えるのではないだろうか。

近年のエスニック都市空間研究では、特定のエスニック集団が集住すること自体が、その集団のエスニシティに彩られた都市空間を自動的に生み出すわけではないと考えられている。むしろ、ある都市空間に対して多様な主体が特定のエスニック集団を想起させるイメージを投影し、それが反復され固定化される過程を通じて、「そのエスニック集団の街」として表象される都市空間が成立するという理論的枠組みが、現在では主要なパラダイムとなっている⁶。これまでの研究では、行政が地区管理の正当化を目的として、当時ネガティブなイメージが強かった「中国らしさ」を投影した結果「チャイナタウン」が成立した19世紀のカナダの例 [Anderson 1989] や、再開発の主体がスラム排除を目的として「日本らしさ」を投影し、「ジャパントウン」を成立させた20世紀中頃のアメリカの例 [杉浦 2007] など、権力を持った主体がエスニック都市空間を成立させるメインアクターである事例が多かった。一方で本稿のロンドン郊外における事例は、少なくとも現地の言語景観と一致するわけではない「香港らしさ」のイメージを、英国への移住に関する不安

⁶ エスニック都市空間の成立と移民の集住状況が必ずしも一致しないことは、Ealham [2005] が示した中国人が一人もいない地区にチャイナタウンが成立した例に端的に示される。

を少なからず有する香港移民たち自身がインターネット上で拡散し、草の根からの投影で「リトル香港」を成立させているケースであるのかもしれない。

ふと、サットンのパブに居た男を思い出す。彼の大演説もまた、「リトル香港」の賜物なのだろうか。

参考文献

愛みち子 2016 「国籍——香港をめぐる国際関係と国籍ショッピング」 吉川雅之・倉田徹 編『香港を知るための60章』明石書店、pp.93-97。

王維 2013 「ロンドン・チャイナタウンの文化空間——他の地域との比較の視点から」『香川大学経済論叢』85(4) : 103-150。

杉浦 直 2007 「サンフランシスコ・ジャパントウン——再開発の構造と建造環境の変容活動主体間関係に着目して」『季刊地理学』59 : 1-23。

Anderson, K. J. 1987 The Idea of Chinatown: The Power Place and Institutional Practice in the Making of a Racial Category. *Annals of the Association of American Geographers* 77(4): 580-598.

Daily Mail. 2025. Little Hong Kong in the West Midlands: How thousands of families are flocking to Solihull... and why it's sending house prices SOARING. <https://www.dailymail.co.uk/news/article-14247751/Little-Hong-Kong-West-Midlands-thousands-families-flocking-Solihull-sending-house-prices-SOARING.html> (2025年11月7日閲覧) .

Ealham, C. 2005 An Imagined Geography: Ideology, Urban Space, and Protest in the Creation of Barcelona's 'Chinatown', c.1835-1936. *International Review of Social History* 50(3):373-397.

Esquire Hong Kong. 2021. 移民英國——熱門移民地點倫敦南部 Sutton 真係幾乎無得輸？移民決定務必留意的事情 <https://www.esquirehk.com/money-investment/move-to-uk-london-sutton> (2026年1月19日閲覧) .

Nunn, J. 2024. Vittles Reviews: A Restaurant in Diaspora. <https://www.vittlesmagazine.com/p/vittles-reviews-a-restaurant-in-diaspora> (2025年11月7日閲覧) .

Home Department. 2020. Hong Kong British National (Overseas) Visa policy

statement (plain text version).

<https://www.gov.uk/government/publications/hong-kong-bno-visa-policy-statement/hong-kong-british-national-overseas-visa-policy-statement-plain-text-version> (2025年11月7日閲覧) .

—— 2025. How many people come to the UK via safe and legal (humanitarian) routes? <https://www.gov.uk/government/statistics/immigration-system-statistics-year-ending-june-2025/how-many-people-come-to-the-uk-via-safe-and-legal-humanitarian-routes> (2025年11月7日閲覧) .

Li, W. 1998. Anatomy of a New Ethnic Settlement: The Chinese Ethnoburb in Los Angeles. *Urban Studies* 35(3): 479–501.

London Remembers. 日付不詳 Chinese lions.

<https://www.londonremembers.com/memorials/chinese-lions> (2025年11月7日閲覧) .

Your Local Guardian. 2025. Sutton ‘history’ by electing first ever councillor from Hong Kong. <https://www.yourlocalguardian.co.uk/news/25088372.sutton-history-electing-first-ever-councillor-hong-kong/> (2026年1月19日閲覧) .

YouTube. 2025. Sutton 香港.

https://www.youtube.com/results?search_query=sutton+%E9%A6%99%E6%B8%AF (2025年11月7日閲覧) .

Zelinsky, W. & Lee, B. A. 1998. Heterolocalism: An Alternative Model of the Sociospatial Behaviour of Immigrant Ethnic Communities. *International Journal of Population Geography* 4(4): 281–298.

備考：本稿は JSPS 科研費 JP24KJ1856 の助成を受けたものです。

(じんぐうじ・こういち 東京都立大学大学院)